平成３０年１１月１日

宗教法人　阿蘇神社

重要文化財６棟
災害復旧工事の進捗について【平成３０年１０月】

平素より当神社の災害復旧事業にご理解ご支援を頂き厚く御礼申し上げます。

さて、別添のとおり１０月の経過をお知らせいたします。今後も安全性の確保に加え、文化財の価値を損なわないよう細心の注意を払いながら、慎重かつ丁寧に進めてまいります。ご迷惑をおかけいたしますが、引き続きご協力くださいますようお願い申し上げます。

記

１，報告内容　重要文化財６棟、災害復旧工事の進捗

　　附　技術者のコラム

２，報告の期間　平成３０年１０月１日から３１日まで

以上

一の神殿・二の神殿
足場解体

修理が終わった箇所の足場を解体しました。

足場解体後の様子です

一の神殿
廻縁縁束埋木

木鼻の取付部とその周りが水腐れしていたので埋木しました。

この部分です

一の神殿
長押修理・取付

解体し、繕いを行ったのち、復旧しました。

写真はこの部材です

一の神殿
木階下切目長押埋木

水腐れ箇所を埋木しました。

写真はこの部材です

一の神殿・二の神殿
向拝縋破風 金物補強

縋破風の尻が木負から浮き上っていたため、縋破風天端から地垂木下端までボルトを通して固定しました。

この部分です

一の神殿・二の神殿
耐震補強材加工・組立

束、繋材、方杖、火打等を組み立てました。

二の神殿
軒下叩き工事

地業の玉石のすき間に砕石を敷き平坦にしたのち、叩き工事を行いました。

二の神殿
向拝柱・柱周り修理

柱の頭を継ぎ、虹梁・海老虹梁を継木し、大斗・方斗を取り替え、巻斗・手挟を矧木しました。

この部分です

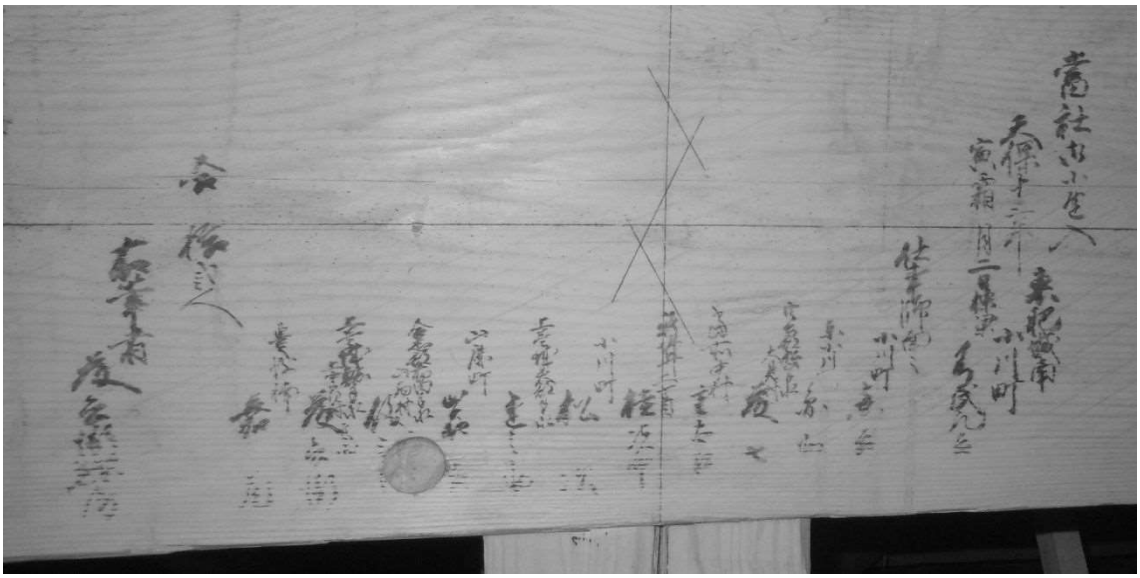
神幸門
石段修理

不陸のある石段を据直ししたのち、欠けのある石段の補修を行いました。

修理工事こぼれ話⑮　神殿・楼門造営に関わった職人さん

以前のコラムで、神殿と楼門に関わった大工さんについて紹介した回がありました。そのコラムでは、部材に残された墨書から大工さんの名前や出身地などが判明したことを紹介していますが、このような墨書は他にも見つかっています。三の神殿からは、大工さんの名前が書かれた墨書が、以前行われた調査から明らかとなっていました*。また、今回の工事により、山師（やまし）と呼ばれる造営用の原木を調達したと思われる方々の名前が書かれた銘板が、楼門から発見されました。今回はそれらの墨書と、神殿・楼門造営に関わった職人さんについてまとめて紹介します。

１．三の神殿の墨書



三の神殿　中引梁　墨書

當社御小屋入
天保十三年
寅霜月二日棟梁　水民元吉
仕事師面々
小川町　寅吉
東小川　圓助
宇土郡松山手永
大見村　藤七
當所中村　重太郎
新坪井二丁目　桂次郎
小川町　松次
上益城矢部手永　連之助
山鹿町　岩吉
合志郡布田手永
山西村　儀三郎
上益城鯰手永
上中間村高田　藤兵衛
豊後楠　嘉蔵
合　拾弐人
右筆者
藤兵衛□□

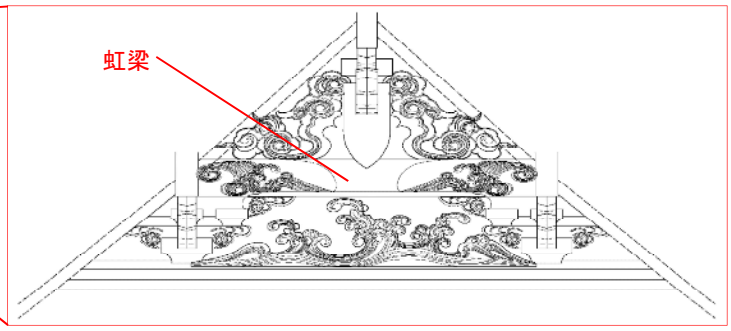
この大工さんの名前が書かれた墨書は、三の神殿の屋根裏の梁に書かれたもので、今回の工事以前に発見されていたものです*。ここに書かれた大工さんのうち、棟梁水民元吉、圓助、藤七、重太郎、松次の５名は楼門の墨書でも名前が見受けられます（楼門には松次郎と書かれていますが出身地が同じため松次と同一人物とみなしています)。嘉蔵は豊後楠出身となっており楠は玖珠のことと思われますが、玖珠は熊本藩領ではないため、どういう経緯で阿蘇神社造営に関わったのか気になるところです。

２．楼門の墨書

楼門からは、山師の名前が書かれた墨書が発見されました。

楼門の２階屋根には、妻飾（つまかざり）という部分があります。その中央くらいの高さに虹梁（こうりょう）という部材がありますが、北面妻飾虹梁の裏面に木製の銘板が釘止めされていました。

楼門　北面



楼門　妻飾姿図

楼門　妻飾虹梁 裏面　山師の銘板

阿蘇宮楼門御棟上嘉永二年
閏四月五日執行山師名付

鶴崎関手永
大在北村
幸吉　十平
宇市　□（為？）吉
吉五郎　喜五郎
□（峯？）吉　□（弥？）吉
佐吉　和宗
和作

右同馬場村
梅太郎　政所村

右同濱村
角左衛門　小市
光次　源兵衛
□（栄？）八　茂助
貞助　八重吉
山川□（町？）
□（勝？）次

高田手永志村
仁左衛門　□（善か吉）次
丈吉　貞次
勘吉　□（菊？）次
次左衛門　辰吉

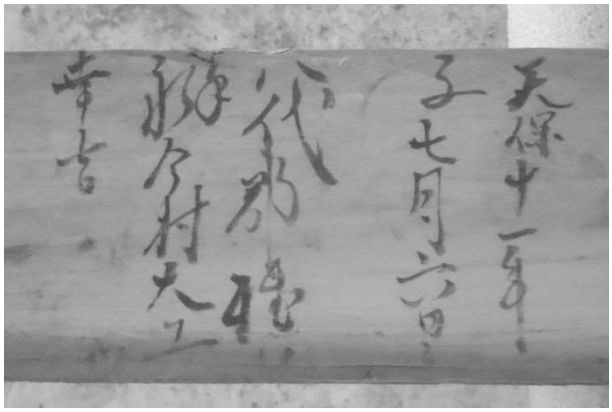
鶴村
伊左衛門
新作
御吉
□（儀？）五
房吉
文吉
岩吉
金八

以上

ここに書かれた山師たちの出身地は、豊後国の熊本藩領です。熊本藩のお殿様は、豊後街道を通り鶴崎から船に乗るというルートで参勤交代をしていましたが、豊後街道の宿場町とその周辺は熊本藩の飛び地となっていました。この墨書の山師たちはその飛び地のうち鶴崎周辺の方々でした。

３．大工、山師の出身地

これまでのコラムも含めて、たくさんの大工さん・山師の名前が登場しました。現在の社殿造営時である江戸時代の天保・弘化・嘉永年間に絞り、神殿・楼門の造営に関わった大工さん・山師の出身地をまとめてみようと思います。なお、今まで紹介した大工さんの名前が書かれた墨書にはこれらのものがありました。



天保十一年
子七月六日□
八代郡種山
手永今村大工
幸吉

一の神殿　付敷居　墨書

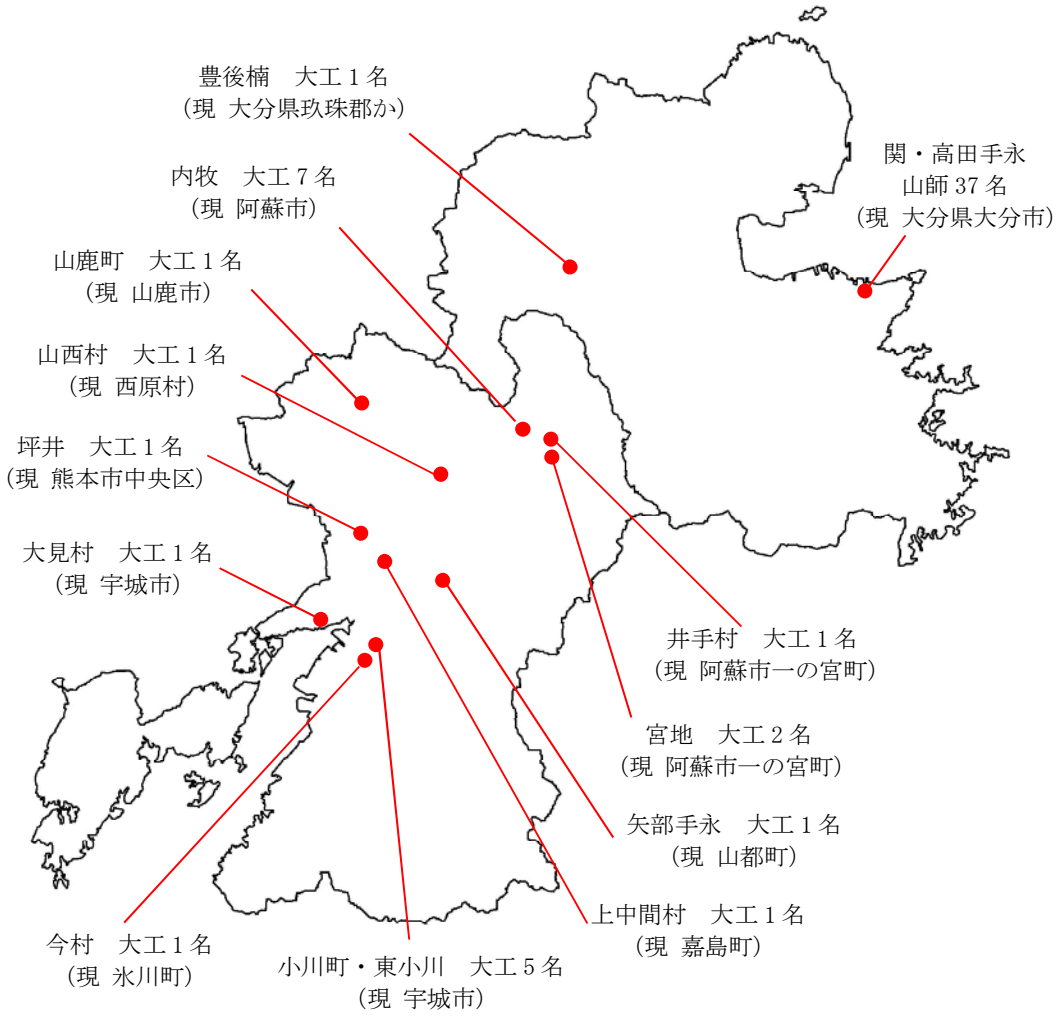
楼門　懸魚　墨書の一部

手附大工
松山手永　藤七
宮地　兵四郎
小川　松次郎
井手村　壽七
宮地　重太郎
小川　三平
内牧　常太
同　藤四郎
同　壽太郎
同　又市
同　久四郎
同　富八
小川　圓助
内牧　廣蔵

これらの大工さん・山師の出身地は地図上では下図の位置になります。

熊本藩領は、天草地方や球磨・人吉地方を除く現熊本県一帯と現大分県のごく一部であるため、阿蘇神社造営に関わった大工さん・山師は、熊本藩領全域に渡っているといえます。個人的には、山師は内陸出身の人が多いのではと思っていましたが、比較的海に近い地域の方々のようです。

（なお、同一人物の可能性が高いのに墨書によって名前の文字や出身地が異なる場合がありますが、便宜上同一人物とみなし、名前の文字や出身地は今回のコラムに掲載した墨書のものに統一しています。）



大工・山師　出身地

まとめてみると、大工さんは、棟梁水民元吉と同じ出身地の小川町から来ている大工さんと、阿蘇神社のある現阿蘇市出身の大工さんが大半を占めていることがわかります。また、造営に関わった山師はこの 37 名以外にもいたのでしょうが、銘板が残っているということは、上棟式にはるばる大分から参列しに来たのでしょうか。詳しいことはわかりませんが、この大工さんや山師からみても、阿蘇神社造営は熊本藩が一丸となって行っていたことが垣間見えます。　（石田　陽是）

＊『阿蘇市文化財調査報告　第一集　阿蘇市指定有形文化財　阿蘇神社建造物調査報告書　一の神殿・二の神殿・三の神殿・楼門・神幸門・還御門』阿蘇市教育委員会生涯学習課・宗教法人　阿蘇神社、2006

阿蘇神社災害復旧現況図

1，国県市補助事業対象

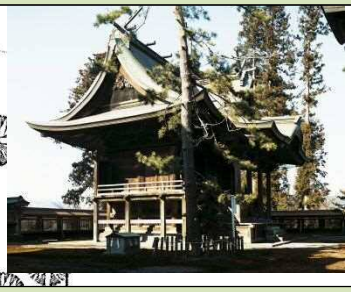
2，阿蘇神社自費事業対象

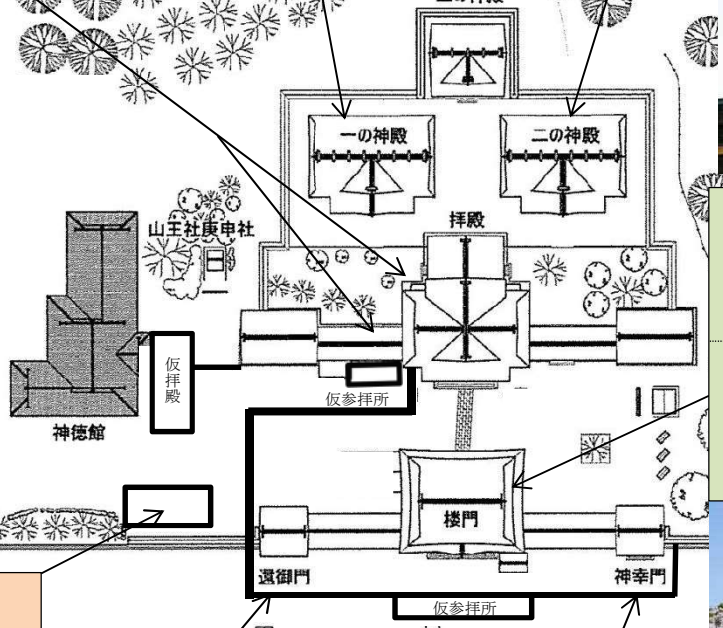
【重文】三の神殿
天保１４年（１８４３）
部分解体修理
着工：平成 28 年 12 月
完了：平成 30 年　9 月

【重文】一の神殿
天保１１年（１８４０）
部分解体修理中
着工：平成 30 年 7 月

拝殿・翼廊（全壊）
昭和２３年（１９４８）
解体工事（平成 28 年 11 月）
基礎解体工事（平成 30 年 8 月）

【重文】二の神殿　天保１３年（１８４２）
部分解体修理中　着工：平成 29 年 5 月





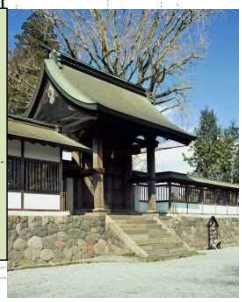
【重文】楼門（全壊）
嘉永３年（１８５０）
解体格納工事
着工：平成 28 年 11 月
完了：平成 29 年 11 月
現在は調査・部材補修を実施中

斎館（損壊大）
昭和３年（１９２８）
復旧工事中
着工：平成 30 年 4 月
完了：平成 30 年 11 月

御札所　昭和３年（１９２８）
部分修理（平成 28 年 9 月）
※楼門脇から移動

【重文】還御門
嘉永２年（１８４９）
部分解体修理
着工：平成 29 年 5 月
完了：平成 30 年 9 月

【重文】神幸門
嘉永２年（１８４９）
部分解体修理
着工：平成 29 年 5 月
完了：平成 30 年 9 月



阿蘇神社災害復旧事業　進捗状況

1，重要文化財建造物６棟（国・熊本県・阿蘇市の補助事業）
総事業費（概算）：９億３０００万円（平成３４年度までの見込み）
うち第１期復旧工事を実施中（事業費：４１５，３７０，０００円）

2，その他の社殿（拝殿・斎館・御仮屋など）※拝殿と斎館は指定寄附金事業として実施（事業費：７億６２００万円）
総事業費（概算）：８億６１００万円
うち斎館の復旧工事は平成３０年１１月に完了見込み／拝殿の復旧工事は着工にむけて準備中